

「ゴールに向かって」

作：長屋宏和

語り：いとうあさこ

13歳のとき、F1という世界最高峰の自動車レースを観に行った。エンジン、オイル、タイヤの焦げつく匂い。高速で走るF1マシンに、僕は心を奪われた。

「僕もここで走りたい！」

夢のスタート・ラインだった。22歳で挑んだレース。僕はレース中のクラッシュで宙を舞った。

意識不明。

僕の人生を大きく変えたクラッシュだった。

数日後、目を覚ますと、天井が見えても全く身体は動かず、声を発することも出来ない。必死に記憶を辿ろうとすると、頭の中がグルグル回って何も思い出せない。何が起きたのか分からなかった。

暫くすると、主治医から「一生、車椅子の生活です」と告げられた。

クラッシュで身体に大きな障害を負い、僕の車椅子生活が始まった。それでも僕は、そう簡単には夢を諦められなかった。「いつかまたレースに復帰する」という強い意志を抱きながら、必死でリハビリに励んだ。2年間の入院生活を終え、僕の身体障害でも操作できるマシンを開発していただき、ついにレースへの復帰を叶えた。しかし、昔は当たり前に出ていた自分のスタイル、すなわち限界の先をさらに攻め続ける挑戦的な走りは出来ぬまま、安全第一だと本能が悟った。これが自分の限界だと思い知った瞬間だった。

「このままレースへの想いだけを追い求め続けたら、きっと自分の人生を無駄にってしまう」とも悟った。

心を新たに、レースでお世話になった方々へご挨拶に行こうとしたとき、事故前に愛用していたスーツでビシッと決めようとした。だが、車椅子だと動きにくく、その上、着づらい。何より、父のスーツを借りてきたかのように、腕が長過ぎてダサく見えた。何故、車椅子の生活をするだけで、オシャレまで我慢しなければいけないのか、と悔しく思った。

クラッシュ前の僕は、大のジーンズ好きだった。

「僕でもカッコ良く穿けるジーンズを作れないだろうか」と洋服リフォームの達人である母に相談をした。20本以上のジーンズを作り直し、ようやくイメージ通りのジーンズが完成した。

「車椅子生活になっても、オシャレを諦めなくていいんだ」

そんな想いを多くの人々にも届け、広げなければと気がついた。

ある日のことだった。僕は誰かの力を借りないと生活できないときもある。エレベーターで乗り合わせた妙齢の女性から、「何階ですか？」と尋ねられ、「1階です。すみません」と何も考えずに答え、軽く会釈をした。直後、強い違和感を覚えた。

「何故、僕は“すみません”と謝っているのだろう」僕は何気に口から出た“すみません”ではなく、感謝を伝える“ありがとう”と言うべきではないか。そう考えを改めた。その日以降、笑顔で“ありがとうございます”を伝えると、お互いの笑顔が生まれることを知った。今まで当たり前に出ていたことでも、どんな小さなことにも感謝する気持ちを伝えることで、「生きている」「生かされている」という実感が湧いてくる。そんな気持ち一つで、いつでも幸せが訪れるようになった。

クラッシュから早いもので20年の歳月が過ぎ去った。

「あのときクラッシュせず、障害を負っていなかったら、僕はどんな人間になっていたのだろうか？」「絶対に今の自分自身ではない」と確信出来る僕がここにいる。「クラッシュが僕を人間として成長させてくれたのだ」と自分自身が一番良く分かっている。

夢はどんなに大きく、手が届かなくても良いと思う。

目標はたとえ小さく、ささやかでも良いと思う。

僕の夢は今でも変わらず、

“自分ならではのゴールを目指し生きること”だから。